ウォーターフロント夜景の特長とその評価に関する研究

STUDY ON PROPERTY AND EVALUATION OF NIGHT LANDSCAPE IN WATERFRONT

西林 大介[1]，岡田 昌彰[2]

Daisuke NISHIBAYASHI and Masaaki OKADA

[1] 株式会社大倉建設（〒530-8530 大阪市北区天神橋2-北2-11）

[2]正会員 博士（工学） 近畿大学講師 理工学部社会環境工学科（〒577-8502 東大阪市小若江3-4-1）

Recently, interest in night landscape has been increasing, and waterfront is one of the most significant spots to enjoy it. In the field of art, expression of night landscape in waterfront has been interested by, for example, Mr. Kiyochika KOBAYASHI, Japanese engraver in 19th century, or Rene Magritte, Belgium painter in the middle of 20th century. This study pointed out the clear reflection of light as significant factor of night landscape in waterfront in their works. In addition, we analyzed contemporary guidebooks of night landscape for Tokyo, Osaka Kobe and Kyoto regions to examine the light sources, their locations and conditions of reflected images.

Furthermore, we attempted to manifest the evaluation of night landscape in Biwa-Lake, Shiga, Japan through in-situ questionnaire investigations and proved the property of night landscape evaluation in comparison with daytime.

Key Words *: Night Landscape, Waterfront, Evaluation, Biwa-Lake, Art*

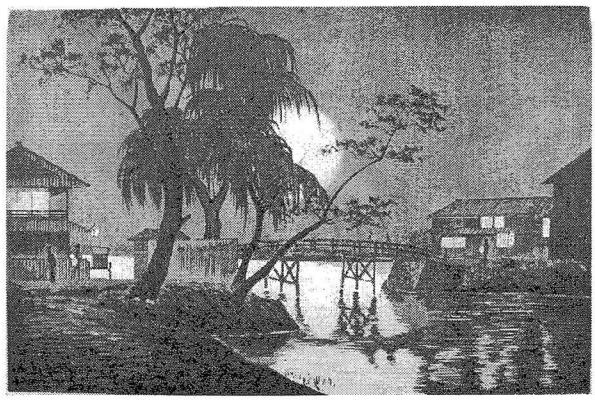
1．研究の背景と目的

近年，夜景に対する社会的関心が高まりつつある．函館や神戸など観光資源として夜景の眺望をアピールしている事例のほか，タワーや歴史的建築を夜間ライトアップする事業も内外において数多く見受けられる．1993年には夜景探訪スポットを紹介する文献[1)]が刊行されその後シリーズ化されているほか，1995年には新しい夜景づくりをテーマとした「世界夜景会議」が大阪で開催されている．また，2003年には“良好な夜景”を形成すべく，ビル航空障害灯の設置基準を国が見直すなどの措置も取られている（図―1）．いっぽうで，夜景を扱った文献[補注(1)]では港湾沿岸や河川などのウォーターフロントがその典型的スポットとして挙げられているほか，夕景・夜景における水面の重要性も指摘されている[3)]．

本研究では，既存の美術ならびに夜景ガイドブックにみるウォーターフロント夜景を抽出・類型化し，その賞玩特性を把握する．さらに琵琶湖大津港地区を対象に景観評価アンケートを現地にて実施し，ウォーターフロント地区における夜景の評価特性を昼景との比較検討とともに把握することを目的とする．

図―1 夜景に配慮したビル航空灯に関する記事
日本経済新聞2003年３月５日号

夜景を対象とした研究として，構図とイメージに着目



図—2　小林清親「今戸橋夕景」[8)]

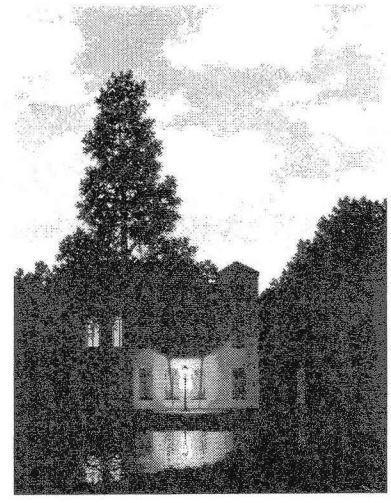
した研究[4)]をはじめ，俯角や可視道路率などの指標を用いて都市夜景の俯瞰景を計量する研究[5)]が行われている．また，原ら[6)]は浮世絵風景画を題材とし，江戸後期から明治初期における夜景表現の変化と“夜景らしさ”を分析している．これらに対し，本研究はウォーターフロントに対象を特化し，夜景表現ならびに現地調査に基づく評価の実態を把握している上で特徴的であるといえる．

2. 芸術にみるウォーターフロント夜景表現

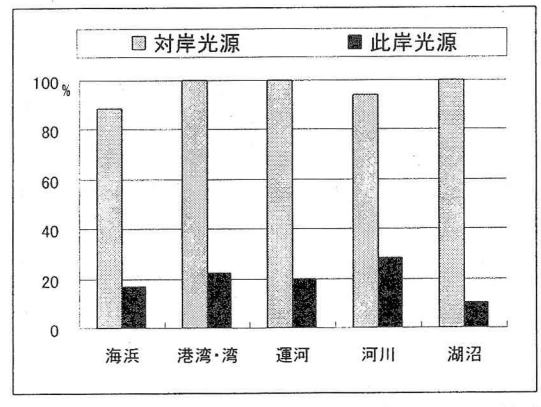
美術や文学の分野においても夜景に対し古くから関心が払われており，ウォーターフロントがその表現要素として取り入れられている作品も見られる．我国では古くは水辺は防災上の要所でもあり，特に夜の水辺を生命の脅威として捉える見方もあるいっぽう，それが同時に「幽玄な美」を与える場所とも捉えられてきた[7)] 補注(2)．

例えば，19世紀の版画家・小林清親(1847-1915)は夜景の傑作を数多く残しているが，その描写対象地として勧業博覧会会場や鍋窯製造所などに並び，水辺が描かれている[補注(3)]．例えば，「今戸橋夕景」（図—2）では隅田川の夜景が月や対岸の料亭船宿，堤燈の光とともに描かれているが，川面に描写されている反射光はウォーターフロントの夜景を一層特徴づけているといえる[補注(4)]．清親のウォーターフロント夜景においてはこのほか，舟（五本松雨月）や人家の照明（隅田川夜），蛍光（御茶水蛍），花火（両国花火之図[9)]），あるいは新造艦の空砲の閃光（川崎月海）を光源とした水面反射光が，河川や海浜の夜景として描かれている．

西洋画においてもアルベール・マルケやポール・デルヴォー，ルネ・マグリットらがウォーターフロントの夜景を特有の表現法で描いている．マグリット(1898-1967)は一連の「光の帝国」シリーズ（図—3）において，昼の空と夜の地上景を共存させた風景を描いている．当然これは架空の風景であるが，この“夜景らしさ”を引き立たせる要素として建物手前に池が描かれている．芸術ジャーナリストのユベールアダッドはこの作品について「窓と街灯の明かりから夜であることが確信される」としているが[10)]，さらにその「夜らしさ」を強調しているのが手前に描かれた水辺の反照光であると考えられる．



図—3　ルネ・マグリット「光の帝国」1954[10)]



図—4　各ウォーターフロント夜景の光源位置

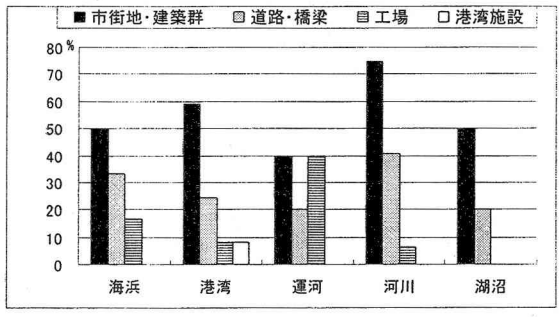
3. 雑誌にみるウォーターフロント夜景の特長

（1）概説

近年では東京，大阪，神戸など大都市を中心に夜景ガイドブックが次々と発刊されているが，その中にはウォーターフロント地区を対象とした事例も少なくない．ここでは既刊の夜景ガイドのうち夜景そのものを紹介したもの[1) 11)-16)] 補注(5)を用い，各ウォーターフロントにおける夜景の特長を分析した（総データ数：122件）．このうち，対象として扱われているウォーターフロントは，港湾49件，河川32件，海浜18件，運河10件，湖沼10件，その他（堀など）３件であった．

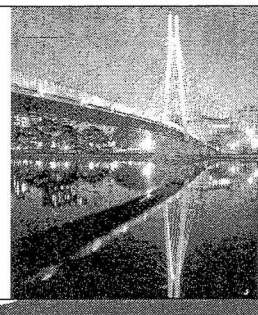
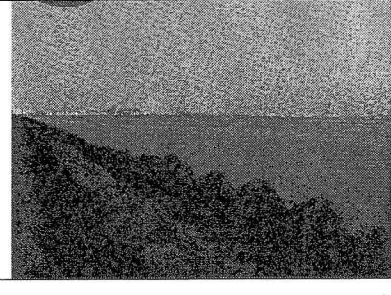
（2）各ウォーターフロント夜景における光源位置

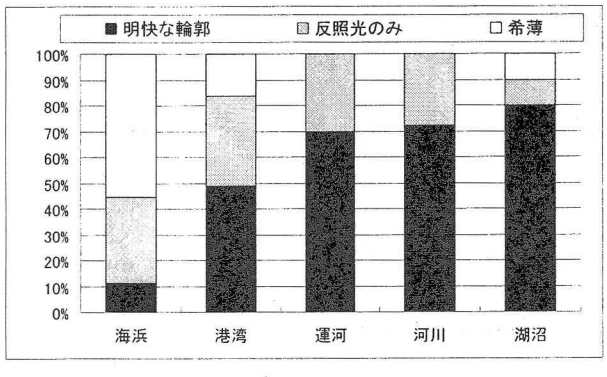
各夜景の光源はいずれも80%以上が対岸となっているが，対岸から此岸に架かる橋梁や此岸の照明などを光源とするものも10～30%含まれている．此岸光源は河川で最も多く(28 %)湖沼で最低の割合(10%)となっている．



図—5　各ウォーターフロント夜景の対岸光源

表—1　反照光の分類

	反照光の状態	例[1) 14)]
明快な輪郭	輪郭が明快に視認可	
反照光のみ	輪郭視認不可 反照光視認可	
希薄	反照光視認不可	



図—6　各ウォーターフロント夜景の反照光特性

また，港湾，運河，湖沼においては全ての事例において対岸光源が含まれている（図—4）．

（3）各ウォーターフロント夜景の対岸光源

各ウォーターフロント夜景の対岸光源について，その内容を分析した（図—5）．光源は市街地・建築群，及び道路・橋梁が多くいずれのウォーターフロントでもそれぞれ4割以上，2割以上を示し，河川においては前者が75%となっている．対岸の工場群を光源としているものもあり，運河では4割を占めている．

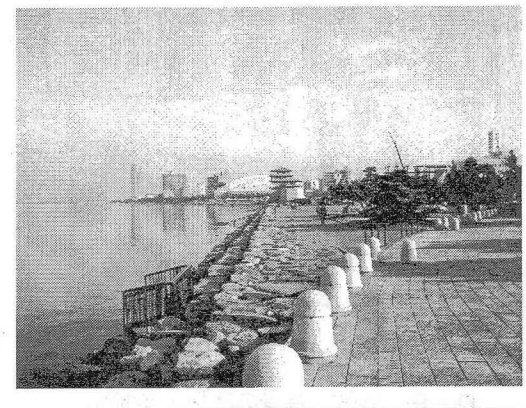
（4）各ウォーターフロント夜景の反照光特性

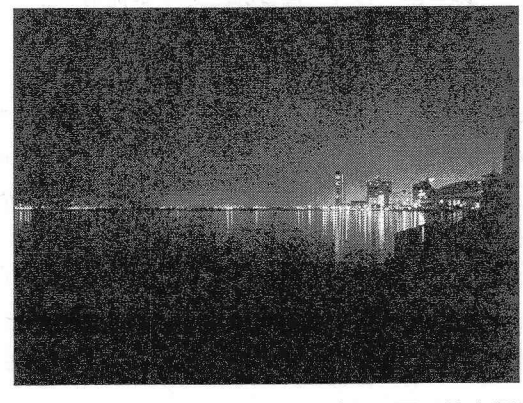
表—1に示すような簡易な目視基準を設け，各ウォーターフロントにおける反照光の種類を分類整理した．輪郭および反照光自体の視認不可によって「明快な輪郭」「反照光のみ」「希薄」の3段階に整理し，その割合を検討した（図—6）．

湖沼・河川・運河の順に光源の“明快な輪郭”が反照される割合が高く，特に湖沼では8割を示している．これに対し海浜，港湾では“希薄”の値が高くなる．湖沼，河川，運河は他に比べ水面が相対的に静的で明確に光源を反照するのに対し，海浜は水面が波立ち対岸との距離も相対的に大きくなることから，「希薄」の割合が高くなっているものと考えられる．

4. ウォーターフロント夜景の評価

前章で反照光の卓越性が指摘された湖沼ウォーターフロントを対象として，本章では現地ヒアリング調査に基づき景観評価分析を行い，その評価実態を把握することとした．





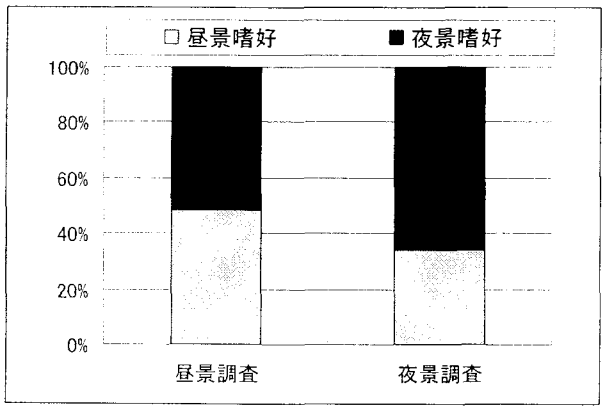
図—7　調査対象地：大津市なぎさ公園（筆者撮影）

表—2　調査概要

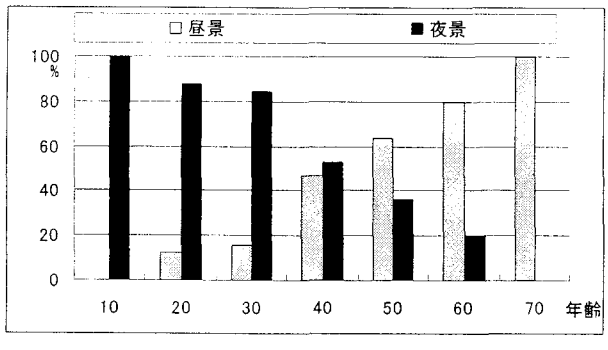
	夜　景	昼　景
調査日時	2004年 9/15：19～21時 10/24：19～21時 11/15：19～21時	2004年10/24：15～17時 11/15：15～17時
調査方法	ヒアリング調査	
調査項目	(1)昼景と夜景の相対的嗜好（選択）	
	(2)(1)の嗜好選択理由（自由想起）	
	(3)(1)で選択しなかった景観に対するイメージ（自由想起）	
	(4)現景観の着目対象	
	(5)年齢[注(6)]（10代，20代，30代，40代，50代，60代，70代）	
データ数	50	54
	104	

表—3　昼景・夜景調査における被験者の年齢層

年齢	10	20	30	40	50	60	70	計
昼景	3	15	11	8	11	5	1	54
夜景	2	9	8	9	11	5	6	50
総計	5	24	19	17	22	10	7	104



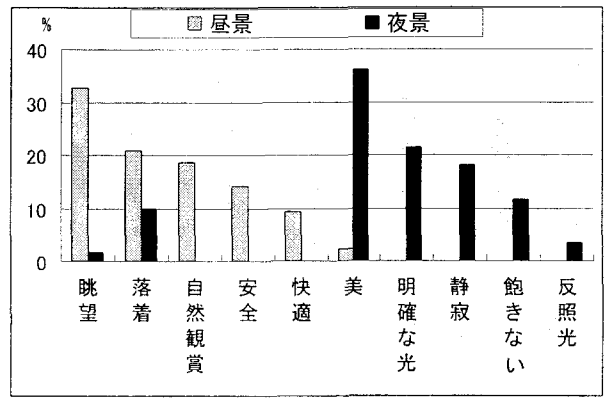
図—8　各調査における昼景・夜景の嗜好



図—9　昼景・夜景の嗜好：年齢別

（1）調査概要

関西地区では比較的知られた場所であり来訪者が多くデータを得やすい点，筆者らの所属機関より比較的近い距離に位置する点などを考慮して，琵琶湖沿岸の滋賀県大津市なぎさ公園調査を対象地として選定した．図—7に示すように，昼景においては木々や湖水面などの自然的要素が明確となる．対照的に夜景では昼景にあった自然的要素が闇によって消去され，昼景においては遠方に見えていた建造物が光源となり夜景において目立つ存在



図—10　昼景・夜景における嗜好理由

となっている．また，夜景においては反照光が明快な輪郭を示しているのがわかる．

調査概要及びサンプルの年齢層を表—2・3に示す．

（2）昼景と夜景の相対的嗜好

各被験者に対し，昼景・夜景のどちらが好きか（嗜好）を尋ねた．昼景調査においては昼景・夜景の嗜好者がほぼ同数であったが，夜景調査においては67%の被験者が夜景を嗜好していることがわかった（図—8）．

また，低い年齢層では夜景嗜好の傾向にあり，年齢が高くなるにつれて昼景の嗜好割合が増加し，40代を境に昼景を嗜好する割合が大きくなっていることがわかった．

（3）昼景・夜景の嗜好理由

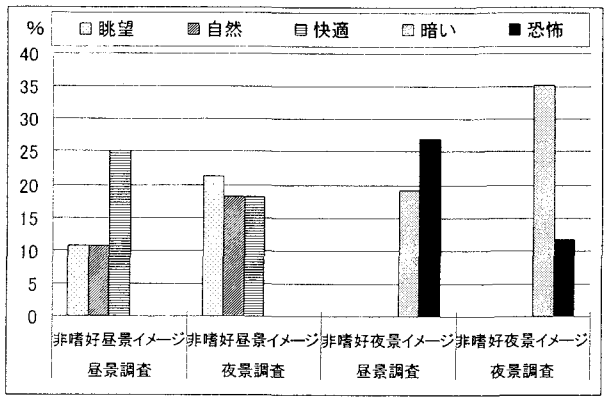
次に，(2)における昼景・夜景の嗜好理由を分析した結果，図—10のように昼景・夜景の間で嗜好理由に明確な相異が見られた．

昼景においては「眺望」が30%以上を占め，以下「落着」「自然観賞」「安全」などが昼景嗜好の理由として指摘されている．いっぽう，夜景においては「美しさ」が36%を占め，以下「明確な光」「静寂」「飽きない」「落着」などの嗜好理由が挙げられている．

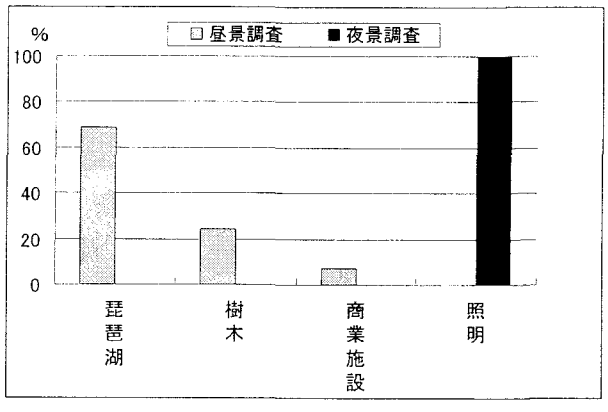
昼景においては琵琶湖の雄大な“眺望”や周囲の自然要素が挙げられているのに対し，夜景においては視覚的要素が多く挙げられているといえ，特に「反照光」の妙を挙げた被験者が3%存在していることも特徴的といえる．また，昼景には「安全」のように夜間との相対的な評価を挙げる被験者も存在している．

（4）非嗜好景観に対するイメージ

次に，（2）において「嗜好景観」として挙げられなかった景観（非嗜好景観）のイメージについて分析を行った（図—11）．非嗜好景観としての昼景に対するイメージはいずれも「眺望」「自然」などポジティブなものとなっており，特に夜景調査においてはこれら2項目の



図—11　非嗜好景観における嗜好理由



図—12　現景観の着目対象

指摘割合が倍増しているのがわかる．

これに対し，非嗜好景観としての夜景に対するイメージは「暗い」「恐怖」という２つのネガティブイメージに集約された．昼景調査においては「暗い」「恐怖」ともに２割前後言及されているが，夜景調査時においては「恐怖」がほぼ半減し，反対に「暗い」がほぼ倍増しているのがわかる．夜間の現地訪問者は昼間の訪問者に比べ「恐怖」を感じる割合が相対的に低く，逆に「暗さ」を感じる割合が相対的に高くなっていることがわかる．

（5）現景観の着目対象

現景観において最も顕著な着目対象として，夜景調査においては全被験者が建造物の照明を指摘し，昼景調査においては琵琶湖，樹木の自然要素のほか，付近に立地する商業施設を指摘した（図—12）．夜間においては周囲の事物が闇によって消去され，人工的光源が顕著に認識されているのがわかる．

5. 結論

本論文は，芸術におけるウォーターフロント夜景の描写に着目し，さまざまな光源と水面反照光による夜景描写の存在を指摘した．さらに現代の夜景ガイドにおける夜景描写を分析し，各ウォーターフロントにおける光源の種類と反照光特性を明確化した．さらに湖沼における昼景・夜景の評価を現地調査をもとに実証的に分析し，人工光源要素の卓越性，低年齢層による嗜好割合の増加，及び視覚的要素の卓越性をウォーターフロント夜景の評価特性として指摘した．

本研究はウォーターフロントに対する人々の認識の実態を把握することに主眼をおいたが，本研究で得られた夜景形成の諸要素を生起しうる景観評価とともに編集し，ウォーターフロント夜景の持ち味を十全に引き出すための視点設定や周囲環境の光源操作に適応しながら，その有用性を明らかにすることが今後必要である．

付録

補注

(1)　夜景評論家の丸田基雄氏や写真家中橋富士夫氏，関西経済同友会[2]によって，1990年代より夜景探訪本が刊行されている．

(2)　たとえば，松村友視[7]は泉鏡花の作品に見られる“夜と水”を考察し，「その先にある何ものかに向けて超え出てゆくべきもの」として捉えている．その中には入水や洪水といった死をイメージさせるものが主として挙げられており，夜の水辺そのものが潜在的にもつネガティブなイメージとして捉えることもできる．いっぽうで，村松が指摘しているように“鏡花水月”ということばが「実体のない幻」転じて詩歌などにおける，“説明できない幽玄な美”を表すこともあり，上記のような水と月の表現がこのような積極的な美学を創造する可能性もある．本論文では特に後者の側面に着目し分析を行うこととした．

(3)　この傾向は後に明治初期を代表する浮世絵版画家となった小林清親門下生の小倉柳村，井上安治の作品にも見られる．

(4)　光と反照光の表現は清親の最も得意とするところの１つとされている[8]．

(5)　ここでは“夜景ガイド”の中でも夜景そのものの紹介に主眼が置かれているものを取り上げ，夜景観賞のできるレストランやホテルなどの施設案内に主眼が置かれているものは分析対象から省いた．

(6)　一部女性被験者に対しては年齢を10代単位で推定している．

参考文献

1）丸田基雄：東京夜景，七賢出版，1993
2）関西経済同友会:KANSAI夜景100選，東方出版，1997
3）土木学会編：港の景観設計，技報堂出版，1991
4）羽生冬佳・渡辺貴介・天野光一：夜景の構図とイメージに関する基礎的研究，都市計画論文集25，1990
5）渋谷敬一・小林隆史・大澤義明：都市夜景の俯瞰景に関する計量分析，都市計画論文集39-3，2004
6）原行宏・久野紀光・斎藤潮:江戸後期から明治初期での「夜景らしさ」の変化に関する研究，都市計画論文集39-3，2004
7）村松友視：「水月」への意志，日本の美学23，ぺりかん社，1995
8）楢崎宗重：高橋誠一郎コレクション・浮世絵第七巻～清親・安治，中央公論社，1976
9）高橋誠一郎：浮世絵大系：清親，集英社，1974
10）ユベール・アダッド：ルネ・マグリット，岩波世界の巨匠，岩波書店，1996
11）丸々もとお：東京夜景２，七賢出版，1995
12）丸々もとお：東京夜景４，七賢出版，1997
13）中橋富士夫：日本の夜景名撮地ガイド，モーターマガジン社，2004
14）丸々もとお：大阪熱夜景，ぴあ，2004
15）丸々もとお：京都雅夜景，ぴあ，2004
16）丸々もとお：神戸美夜景，ぴあ，2004